閃光戦隊ジュエルスターズ

❷紅(くれない)の超戦士

秋津 透

イラスト 新田真子

富士見ファンタジア文庫

富士見ファンタジア文庫

閃光戦隊ジュエルスターズ
② 紅の超戦士

平成元年10月20日　初版発行

著者——秋津　透

発行者——中井茂雄

発行所——株式会社富士見書房
〒102 東京都千代田区富士見1-12-14
電話　03(261)5375(代表)
振替　東京7-86044

印刷所——新興印刷
製本所——大谷製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります
©Fujimishobo 1989, printed in Japan
ISBN4-8291-2338-9 C0193

閃光戦隊ジュエルスターズ

② 紅(くれない)の超戦士

富士見ファンタジア文庫

15-2

口絵・本文イラスト　新田真子

目次

プロローグ　5
1　只では済まない入学式　13
2　おーっとこれまた意外な展開　41
3　蠢動！　IKAIYO日本支部　58
4　不思議、不思議の華陽学院　79
5　嵐を呼ぶ少女戦士　107
6　崑崙八卦拳の挑戦　139
7　決戦の夜・序盤戦　162
8　決戦の夜・中盤戦　195
9　決戦の夜・終盤戦　226
エピローグ　252
あとがき　260

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

プロローグ

「ふあ〜〜〜、平和だね〜〜〜」

川面に釣り糸を垂らし、小原昭之助巡査は大きく欠伸をして空を見上げた。すっかり春めいた暖かい陽射しの中に、柔らかそうな綿雲がいくつかぽっかりとうかんでいる。いい日和だなあ、と彼は心地良さそうに目を細めた。

ＩＫＡＩＹＯの変態野郎との首都東京を揺るがす壮絶な闘いから約一週間、小原巡査はやっと念願の代休をもらい、一日かけて奥多摩の渓谷に釣りに出かけたのである。幸い天候にも恵まれ、彼は半分日向ぼっこの気分でほけーっと川辺に腰をすえていた。獲物はまだからっきしだが、どうせ持って帰って自慢する相手があるわけでもなし、どうでもよろしい。

と、その時、一陣の風がひゅるるるっと小原巡査の身辺を吹き抜けて行った。渓谷を風がわたって行くのはごく自然な現象なのだが、彼は何となく奇妙な感じを受け、思わず

周囲を見回す。すると、まるで彼に合わせたかのように、周囲の森の樹々から一斉に野鳥たちが飛び立った。ばさばさっという慌ただしい羽音と、ぴいぴいぎゃあぎゃあといった泡を喰ったような鳴き声を耳にして、小原巡査は再び天を見上げて小さく呟く。

「おい……何がおっ始まるんだ？」

すると、その問いに応えるかのように、ひゅうひゅうと唸りをあげて風が吹き始めた。それも、先刻吹き抜けて行ったような穏やかな風ではない。川原の砂利が、かなり大きいものまでざらざらと動き、樹々の大枝が轟々としなって唸るような猛風だ。思わず帽子を押さえて顔を伏せながら、小原巡査は奇妙な事に気がついた。これだけの猛風が吹いているというのに、雲がまったく動いていない。

「地表だけに吹いてるのかなあ？」

もう一度ちらりと天を見上げ、彼は小さく首をかしげる。しかし、そんな悠長な疑問を言っていられる場合ではない。猛風はますます勢いを強め、砂利が礫となってぴしぴし飛び始める。小原巡査は丸っこい身体を屈め気味にして、急いで釣り道具を片付けると川原から土手に登りかかった。

その瞬間、不意に周囲が白い閃光に包まれ同時にばりばりっと凄まじい大音響が轟く。ほとんど反射的にうわっと叫び、彼は荷物を放り出してうずくまった。

「ら、落雷、かあっ？」

そんな馬鹿な、と彼はまたもちらりと天を見上げ、小さく唸る。空はあい変わらずのどかに晴れわたり、とても雷が落ちるような天気じゃない。だけど、今のは落雷だ、と小原巡査はうずくまって頭を抱えたまま呻いた。それも遠雷じゃない。おそらくは百メートル以内の、ごく近い場所に落ちている。うかつに立って直撃を喰らったら、そのまま真っ黒焦げになってお陀仏だ。桑原桑原と呟きながら、彼は身体を更に低くして目を閉じ耳を塞ぐ。猛風はますます勢いを増しており、飛ばされて来た小石や小枝がうずくまった身体にぴしぱしと当たるが、今はそんな事には構ってられない。

と、その時、灼きつくような白い閃光が再び周囲を満たし、更に、先刻の轟音を上回る大轟音が、ほとんど衝撃波と化して川原に響きわたった。うわっ来たっ、と小原巡査は思わず呻く。これは、先刻のよりもっと至近だ。そうすると、次はいよいよ直撃だろうか。とにかくこれでは、雷槌が遠ざかるまで動くに動けない。去ってくれ、さっさと去ってくれ、と彼は目を閉じ耳を塞いだまま呪文のように呟いていた。と、そこへ、思いがけなく人の、それも若い女性の声がする。

「なんだ。人間がいたのか」

「え？」

狼狽気味に、小原巡査は目を開けて顔を上げた。いつの間にやら、あれほど吹きすさんでいた猛風もぴったりと止み、彼の目の前には臙脂色のセーラー服をまとった整った顔立ちの少女が、いかにも平然とした様子で立っている。慌てて身体を起こした小原巡査は、やや口ごもり気味に彼女に訊ねた。

「き、君、大丈夫かい？　今、その、風と雷が、ずいぶん、その、凄かったみたいな、その、いや、そんな気がしたんだけど、うーん、いや、僕の気のせいだったのかな。いやまあ、気にしないで。うん、まあその、そんな気がしたんだが、やっぱり、変だものな」

言ってるうちに、小原巡査の口調はあやふやを通り越してしどろもどろになってくる。何しろ周囲は平穏な春の日そのもの、風も雷も気配さえ無い。その上、目の前の少女はまるで冷静というか、むしろ冷徹な眼差しでじっと彼を見すえている。何を馬鹿な呆言口走ってるんだこの男は、と言わんばかりの表情に、小原巡査はばつが悪そうに苦笑すると、少女に背を向けて釣り道具を拾い上げた。するとその背後から、愛想も何もないぶっきらぼうな声がかかる。

「早く立ち去れ。邪魔になる」

「は？」

荷物を手にした小原巡査は、虚を衝かれたような表情で振り返った。

「邪魔って、誰の？」

「私のだ」

少女の声と鋭い眼光に、わずかながら苛立ちの色が混じる。美人には違いないけど、と小原巡査は思った。ずいぶん鋭い印象の娘だな。まるで、そう、鍛え上げられた日本刀か、さもなければ超音速軽戦闘機といったところか、と彼は兵器狂ならではの評価をする。と、その鋭い美少女が、更に尖った声で言い放った。

「立ち去らないなら、そちらに構わず始めるからな。余計な負傷をしても知らんぞ」

「始めるというと、いったい何を？」

小原巡査のいささか間の抜けた質問には答えず、少女は肩のところで無雑作にまとめた長い黒髪をばさっと払うと、そのままの動作でふっと宙に跳ぶ。鮮やかな身のこなしに目を見張る男を完全に無視して、少女はふわりと渓流に突き出た岩の一つに着地した。そして彼女は、ゆったりとした動作で左手を自分の頭上にかざす。

「はあああああああ……」

かすかに声に出しながら、少女は長々と息を吐く。それとともに、右手がやはりゆっくりと腰の脇に構えられる。中国拳法かな、と小原巡査は好奇の目を輝かせた。

だが、その瞬間、彼はぎくりとした表情に変わり、思わず周囲を見回す。何と、少女が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

構えをとると同時に、再びひゅるるるると突風が吹き始まったのだ。
「ま、まさか……」
まさか、この娘が突風を吹かせているのか、と小原巡査はさすがに蒼ざめて唸る。しかしこれは、絶対に偶然なんかじゃない。明らかに彼女は突風を呼び、思うがままに操っている。常識外れだろうが何だろうが、これはもう見てしまった者にしかわからない実感という奴だ。
「そうすると……まさか、雷もこの娘が……？」
唸る小原巡査には文字通り目もくれず、少女はゆっくりと構えを変化させてゆく。それに応じて風も微妙に方向を変え、勢いを増す。と、不意に突風がぎゅるるるると渦を巻き、少女の身体を竜巻状に包み込んだ。長い髪とスカートがぶわっと巻き上がり、形の良い脚が太腿まで露わになるが、彼女はまるで気にもとめない。そのまま軽く目を閉じ、両手を正面に向かってまっすぐ伸ばす。その掌がぼおっと青白く光りだしたのを認め、小原巡査が思わず息を呑む。
「まさか……まさか……うわあっ！」
「哈っ!!」
少女の唇から発せられた鋭い気合は、小原巡査の耳には届かなかった。気合と同時に彼

女の掌から、轟音をあげて雷撃が放たれたのである。その一瞬、小原巡査の視界のすべてが耐えきれないほどに白く輝き、凄まじい大音響で世界が裂けた。そしてそのまま、あっと思う間もなくすべてが暗転して、彼はすみやかに意識を失う。

どのくらいの間気絶していたのか良くわからないが、再び小原巡査が意識をとり戻した時には、すでに謎の少女は影もかたちも無かった。周囲はまるで何も起こらなかったかのように、まったく平穏に静まり返っている。どこからか、ちちちちと野鳥の鳴く声が聞こえ、彼は顔を顰めて川原から身を起こした。

「何だったんだ、あれは……」

もしかすると、夢でも見たのかも知れないな、と小原巡査は半ば以上本気で思う。現実に起こった事にしては、とにかくあまりにも突飛に過ぎる。何にせよ、うかつに他人に話さない方が良さそうだな、と彼はきわめて常識的な事を呟いた。少なくとも、これ以上正気を疑われちゃ、たまったもんじゃない。

しかしもちろん、小原巡査が見たものは、白昼夢や妄想では無かった。

1　只では済まない入学式

「はーあ、東京の高校って、凝った構造してるのねー」
私立華陽学院高等部の、古風で重厚なレンガ造りの校舎を見上げ、ジュエル・エメラルドこと夜鳥みどりは、感心したような口調で呟いた。
「あの屋根から壁につながる構造、ずいぶん労力をかけてあるみたいだし。こっちの時計塔から玄関の方も……」
「おいおい、ちびちゃん。感心してンのはいーけどさ、もたもたしてっと入学式に遅れちまうぜ」
長身の少女、ジュエル・ダイヤモンドの金剛谷朗が、軽く笑ってみどりの肩をぽんと叩く。みどりは夢から覚めたような表情になり、朗を見上げてこっくりとうなずいた。
急死した祖父の遺言で、みどりが相織財閥の総帥相織邦光老人の居宅に転がり込んでから、そろそろ半月が過ぎようとしている。彼女の後見役を引き受けた相織老人は、さっそくその影響力を駆使して、知る人ぞ知る名門女子高等学校、華陽学院に彼女の入学を認め

させた。もっともみどり本人は名門とかそーゆーのは良くわからず、相織老人の孫娘でジュエル・サファイアでもある相織葵と、彼女の従姉の金剛谷朗の二人が華陽学院の一級先輩に在籍しているので、入学する気になったらしい。そして今日が、その入学式当日なのである。

「あら、二人ともこんな場所で何をやっているのです？」

不得にみどりと朗の背後から、硬質の、ちょっと詰問調の声がかかった。振り返ってみると、案の定、相織葵が切れ長の目に軽い非難の色をうかべて二人を見やっている。

「みどりさん、新入生は講堂に集合して、クラス分けを確認するようにという放送、聞こえませんでしたか？　急がないと、式典が始まってしまいますわよ。それに朗さん、あなたは誘導班の班長でしょう？　確かに誘導班の仕事は主に式典の後ですけれど、それでもあんまり班長がのんびりしていては規範というものがつきませんわ」

「あー、わーった、わーったよっ」

朗はふて腐れた表情で、短髪の頭をぽりぽりと掻く。こういう仕種をすると、ちょっと十六の少女には見えない朗である。まして今は、淡茶地の絣の着物にえび茶色の袴という服装だ。どー見ても明治時代の書生っぽか、青年柔道家というところだろう。

ちなみにこの妙な服装は、華陽学院創立以来の伝統を誇る制服なんだそーである。この

学校では、通常時は私服で構わないが、入学式や卒業式等の式典には制服姿で出席しなくてはならない。だから当然、葵もみどりも朗と同じ服装をしているわけだが、彼女たちは多少懐古調とはいえ、結構まともに女学生に見える。その差違が、朗としてはいささか面白くない。

「わーったよ。講堂に行って、静かに待機してりゃいーンだろ。だけど、ところでさ、葵こそこンな場所で何やってンだい？」

朗のはしばみ色の瞳が、ちょっと不審気に従妹を見やる。

「まさか、オレたちに叱言喰らわすために、わざわざ講堂から出てきたわけじゃねーンだろ？　風紀委員長がそこまで暇なはず、ねーもンな」

「当然ですわ。私はミス・フローレンスを呼びに、保健室に行くところなのです。その途中でたまたまあなた方を見かけたので、これはいけないと思って注意しただけの事ですわ」

葵は胸を張って堂々と答えた。が、そのとたん、形の良い眉がわずかに寄る。

「あら、いけない。このままでは、本来の用事の方が遅くなってしまいますわね。それでは二人とも、すぐに講堂へお行きなさい。私もすぐに、保健室に行きますから」

「へーい、へい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb